

京鹿子

平成二十六年十月一日発行
通巻一〇七二年(冊)十月一日発行

10月号

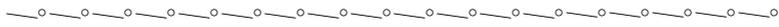
丸山佳子顧問追悼特別号

豊 田 都 峰

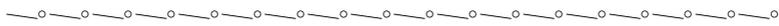
心響集 その十

隱沼のおもだか日矢のひとすぢ
おもだかの葉と一輪は池の紋章
ねねのみち甘酒処は小さき店
水替へて金魚に空をもどしけり
浮舟を追へば河原の八重葎
浮舟の世捨てや風の夏柳





愁ひにも果つ十帖や雨葎
流灯のおのがあかりの水うねり
流灯の横すべりしてほめき消ゆ
朝涼をふりまく瀬流れ嵯峨も奥
涼風を小督とともにする木陰
朝霧や愛宕路となる辻あたり
流木のなかば埋れし浜晩夏
ひぐらしのさそひに林の径ほそし



— 故 丸山佳子 作品 —

浄土の菊

故
丸山佳子



白菊やおのがこころの観世音

わが未来たくす佛の菊ましろ

秋風や來世を信じ佛みる

秀華採集

臥しゐても立ちゐても釈迦梅雨晴るる

伊藤 希 眸

天然自然現象は人間の力ではどうしようもないものがある。梅雨の晴れ間の訪れも「釈迦」を持ち出すあたりがよく、しかも「臥し」「立ち」自在な状態での慈悲の差し出し方とする。なにしろ具体的に描くところを評価。

ねむれずにくぐもる魚と梅雨の月

鈴 鹿 けい子

判じ物伏せ字ばかりや落し文

辻 本 俊 子

「ねむれずにくぐもる」すなわち不眠でつつまれて何かはつきりしない状態の「魚」と「梅雨の月」とをつないだところがよい。後句は上五中七に描く状態の「落し文」と響き合うように表現したことは手柄である。



— 近 詠 —

天空

鈴鹿 仁

天 空 の い よ よ 拡 が る 稻 の 花
あ を あ を と 山 一 景 の 涼 新 た
竹 の 春 ど の 径 ゆ く も 佛 み ち

— 追 懐 — (その二)

冬 涛 に 男 礁 女 礁 尖 り 合 ふ

〔昭和四十九年作〕
〔越前吟旅〕

劍 豪 は 長 者 の 血 筋 初 土 筆

〔昭和五十年作〕
〔柳生・月ヶ瀬吟行〕



近詠

葭五位

和田 照海

葭五位に狙はれてゐる堀めぐり
堀めぐる難所の橋や井守浮く
貝風鈴遠海鳴りに応へけり
樋門番入道雲と交替す
五輪墓真向き背きに弟切草



神麓集

鱧づくし 藤岡紫水
 千年の慈悲滴らす高野槇
 神在す証と思ひ清水汲む
 たわむる雲一つなき盆満月
 炎天下杭一本の男振り
 鱧づくし壁に自慢の写楽の絵

今年酒 故竹貫示虹

今年酒もすこし生きてゐたくなる
 亡き人へ銚ちり釐傾け十三夜
 汝ゆゑにこの世よかりしそばの花
 終りあるゆゑの華やぎ秋の虹
 天高し南大門の屋根の反り

松田都青

鳩の巢は町の地図には載せないで
 心こそ最後の秘境虹の果て
 梅雨に濡れ戦場で濡れ兵の墓
 垂直と言ふ位置知らぬ熱帯魚
 決断がころころ変はる濃紫陽花

遠郭公 北川孝子
 生き乍ら会へぬ人殖ゆ更衣
 黙想の木椅子の堅し花水木
 晩節をほろほろと生き遠郭公
 鳥の恋日暮のこゑに微熱あり
 木洩れ日の息をもらひて花河骨

黒蛇 丸井巴水

観音へつづく石段汗で減り
 梅雨雲の落ち込む盆地僧山へ
 黒蛇の過ぎりし道を十字越え
 大河を望む木橋の川蜻蛉
 葛餅や不気味に透ける餡の色

夏霧 塩貝朱千

巴里祭いまも地球に戦の血
 水郷の水音にねむき合飲の花
 羽衣のやうな雲見に夏鳶
 川風や青夜の橋を渡るまで
 夏霧や蛹となりて巻かれぬる



京鹿子集

豊田都峰選

臥しぬても立ちぬても釈迦梅雨晴るる

千葉 伊藤 希眸

潮騒を遠くみどりの夏來たる

立夏かなをちこち木瘤育ちゆく

白茅原玉兔のはねる神代かな

ねむれずにくぐもる魚と梅雨の月

京都 鈴鹿けい子

ががんぼや弱音を吐けばばらばらに

負の連鎖も神の手の内はしり梅雨

ひとおよぎ蛇は女人へもどりゆく

判じ物伏せ字ばかりや落し文

和歌山 辻本 俊子

大皿の万里の波濤夏座敷

鳶の笛茅花野を吹く風に乗り

幾枚もの舌もてあます棕櫚の花

烏瓜かばんに提げし児今二十歳

睡蓮が庭で華添へ琳派展

時差ボケで早起きとなる夏の朝

芍薬を写生する娘のまなこざし

風鈴のとぎれとぎれに友の顔

家路へと向ふ涼しき灯を目当て

朝焼や西空ピンクに染まりけり

氷水何より旨し透きとほり

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

名利の筈目すがし花菖蒲

札幌 野村 鞆枝

川音のすけて聞こゆる夏のれん

京老舗藍にほひ立つ夏のれん

花菖蒲敗者のほこり秘めし沼

その話卯の花腐し明日返事

空青く山滴りて握り飯

清水涌くほとり静かな昼さがり

筍を掘る喜びや土の香も

山車引く手少子化により引くるなし

朝顔を育ていつくしみ宿題に

暑中見舞届き安否のうれしかり

かき氷幼児の顔の見えかくれ

宿の廊山梔子匂ひ朝風呂へ

梅雨入りや孫の電話に腰伸びて

泥遊び見守る母や五月晴

受話器に兎の声響く梅雨の入り

実梅打つほのかな老いであるうちに

塩三グラム面白い夏生きられぬ

大向日葵そこまで来てゐる死のかたち

自らの曲りに傷むバナナかな

どこまでも青蘆どこでも他人

金魚玉宇宙の闇を浮遊せり

一病と上手に生きて夏至の雨

白南風や球根むむとうごくころ

芝青む子供らと聞く地の鼓動

大戦の旭日旗は父なつの月

雷鳴に競ふ声張り伝導師

新聞をぼりと昼の目覚めかな

緑陰の笛吹川を釣りにけり

交番は留守紫陽花の暮れし色

うすばかげろふ後ろの道はもう見えぬ

自転車の軋み遠のく青簾

小げら打つ梅雨の晴間を広げゆく

巨木より芒種の鳥の飛び立てり

立葵残し夕暮れ人の暮れ

スイスより届くメールや簾越し

肩触るる紫陽花の彩百八段

さくらんぼ色の移りし妹の唇

申し受けむ妣の残せし夏料理

眼鏡替ふ錯覚を産む金魚玉

隠耀の花苔いろはかたはらに

枇杷の実や段畑越しの地平線

夏のきて神の通ひ路かけめぐる

妻癒す旅のなかばに日傘さす

布川 孝子

高野 春子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船橋 元橋 孝之

佐々木紗知